# 公開研　公開授業2

# 芸術科（音楽Ⅱ）「源氏物語」の世界を音楽から眺めよう

**授業者　居城勝彦**

## 1. 研究主題との関わり 〜 教科融合・連携の意義 〜

　『源氏物語』は王朝物語文学の最高傑作であり、古典探究の中核をなす教材である。その世界は非常に細やかかつ情緒深く描かれているが、従来は主に活字化されたテキストを中心に理解が進められていた。もちろん、古語の意味や用法、文語や訓読のきまりを的確に把握することは不可欠であるが、併せて古典作品を通してものの見方・考え方を深めたり日本の言語文化について考えを広めたり深めたりすることも求められている。そこで、古典探究を軸に芸術科や歴史科（日本史）と連携を図ることで『源氏物語』が示す世界をより広く探究できるのではないかと考えた。それは一つの事象に多角的な視点を持って切り込むことであり、生徒エージェンシーの育成につながるものと捉えられるのではないだろうか。今回は『源氏物語』を中心とし、古典、芸術、歴史（日本史）で教科連携の授業を実践した。古典探究における学習と並行して、芸術の授業や歴史（日本史）の教員による解説を行うことで、生徒一人ひとりの『源氏物語』に対するイメージを豊かに深めていくことを目指した。公開研では、古典探究の授業後に音楽Ⅱ・美術Ⅱ・工芸Ⅱ・書道Ⅱの各芸術科目に分かれて授業を展開した。

## 2. 公開授業の概要 〜 生徒エージェンシーの育成の観点から 〜

日本の伝統的な音楽については、中学校音楽科の鑑賞領域で、雅楽・歌舞伎に触れている生徒が多い。また、箏や三味線、篠笛、和太鼓の演奏経験がある生徒もいる。音楽Ⅰ履修開始時のアンケートや本時までの授業での生徒とのやり取りから、学習や経験の差は大きいと捉えている。高校入学後、音楽Ⅰ（1年時履修）では「劇音楽をうたおう」の活動で能楽の謡を経験し、音楽Ⅱ（２年次履修）では歌舞伎の下座音楽について触れた後、国語科の教科行事として歌舞伎座での古典劇鑑賞を経験している。

また、この１時間の学習で小中学校での雅楽に関する学習を「源氏物語」と関連させる中で再整理し、外来からどのように音楽が入り、先人たちがそれをどのように扱い、整理して今日に至っているかという視点を生徒たちが持てるようにすることが生徒絵エージェンシーの育成に繋がると考えている。

1. 本時のねらい　　「源氏物語」の世界を音楽から眺めよう
2. 本時の授業展開

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 時間 | 学習の流れと生徒の活動 | 教員の指導と手立て |
| 導入( 5)展開(10)(10)(５)（１５）まとめ(５) | ○「源氏物語」の世界に鳴り響く音や音楽をイメージしよう。・風の音、鳥や動物の声、楽器の音・言葉は思い浮かぶが、音楽は…○絵巻物に描かれた音楽を確認しよう。・見たことある楽器だけど名前は何かな。・どこに楽器が書かれているのだろう。○「源氏物語」に音楽が描かれている場面はどれくらいあるだろう。・タイトルが音楽に関するものもある。・思い浮かばないから少ない気がする。○貴族文化における音楽は雅楽である。○管絃「越天楽」から生まれた「越天楽今様」を歌おう・初めて歌う。小学校の時に歌った。・歌詞の意味がようやくわかった。○雅楽はどこからきたのだろう・雅楽は中国大陸や朝鮮半島から伝わった音楽が国風化したものと日本古来の音楽が整理されたものである。・いくつかの種目に分けられる。○「源氏物語」の「紅葉賀」から「青海波」を鑑賞し、特徴を見つけよう。・２人の動きが揃っている。激しい動きはほとんどない。・衣装を見せるように踊っている。・弦楽器の音がない。○もう一度「源氏物語」の世界に鳴り響く音や音楽をイメージしてみよう。・音楽や踊りがある。・楽器の音色が聴こえてくる。 | ・まずは生徒の持つイメージを確認する。何も浮かばない場合も、自分の現状を自覚したことを認める。次に絵巻物から楽器を奏でる場面を提示し、そこに鳴り響く音楽を想像させる。・正倉院の琵琶も提示し、本時で扱う時間軸が奈良〜平安〜鎌倉時代あたりで、「源氏物語」そのものの時代より広いことを意識させる。・古典探究で配布されたものと同様の資料を使い、源氏物語全体を概観しながら、その中で音楽に関して書かれている部分（54帖中46帖に音楽に関する記述がある）を確認する。・中学校までの既習事項である雅楽と「源氏物語」の世界を近づける。・旋律のみ演奏しながら繰り返し歌うことで旋律を覚え、歌唱させる。今様について触れ、その一例として黒田節を紹介する。ヒトによって音楽が伝わることをイメージさせる。・雅楽が生まれた経緯を確認する。舞楽の伴奏として管絃が独立したこと、世界最古のオーケストラと呼ばれることなどに触れ、生徒がよく触れる音楽との共通点を持たせるようにする。また。舞楽・管絃・歌物・国風歌舞という雅楽の種目についても触れる。・「青海波」は縁起が良いことを指すことを伝え、音楽や踊りの特徴に着目させる。・衣装や動きの特徴、物語の記述に触れる。・舞の美しさを観ている人たちがどう受け取ったのか、「桐壺」での光源氏の描写と関連づけイメージさせる。・文字情報としての言葉から読み取る「源氏物語」の世界に鳴り響く音楽や動きを伴う舞いがイメージできるようになった自分の変容に気づかせる。 |

## 3.公開授業を受けて 〜 単元における生徒の変容と今後の課題 〜

平安時代は、それ以前から流入した外来の音楽が貴族文化の中で国風化された時代である。当時の貴族にとっての教養「詩歌管絃」の音楽部分（雅楽）を取り上げた。芸術の他科目との関連も考え、源氏物語絵巻をはじめとする貴族の生活の様子がわかる絵巻物から楽器を演奏している場面を提示し、平安貴族の生活の中に鳴り響いていた音楽のイメージを具体化させていった。また、平安中期以降流行した「今様」から「越天楽今様」の歌唱に取り組み、当時の人々が生活の中で雅楽とどのように接していたのかを体験させた。さらに「紅葉賀」から光源氏と頭中将が舞った「青海波」（左方の舞）を鑑賞し、「源氏物語」の世界観の中に音楽を鳴り響かせることを試みた。

最初の発問で雅楽や使用される楽器についてワークシートに記述した生徒がいたが、尺八や三味線という当時は成立していない楽器を挙げる生徒や、音や音楽は何も浮かばず「無」と記述する生徒もいた。前者は「日本の伝統音楽」という括りの中で思いつく楽器を挙げたものと考えられる。音楽科の学習において日本の伝統音楽がトピック的に題材化され、時系列が捉えづらいことが要因として考えられる。後者は文字情報から作品を理解することが無視式のうちに身についていると考えられる。生徒個人の知識構成に教科の壁がつくられていることがわかる。このような生徒たちも絵巻物から管絃を奏でる様子を見つけることや、「越天楽今様」の歌唱で旋律の持つ響きや七五調の言葉のリズムを感じることで、平安時代の音楽をイメージすることにつながっている。

また、雅楽が中国大陸や朝鮮半島から伝わってきた音楽とともに、それ以前から日本にあった音楽を再整理して現代まで伝えているという史実の中に、人々が長期にわたる営みの中で大事にしてきたことに気づいている生徒もいた。授業内で取り上げた「雅楽は世界最古のオーケストラ」という表現の意味と価値に気づくには、さらなる学習経験が必要だと思われるが、そのためには音楽科のカリキュラムの再構成も必要だと考えられる。

授業終末の学習感想には、「源氏物語」に雅楽の響きや舞楽の動きがイメージとして付加された様子がうかがえる。今後、古典探究の学習の中で展開される「源氏物語」のイメージに、生徒自身の中で色合いや動きが加味されることにつながる実践となった。

## 4.引用文献

　・「源氏物語と音楽」中川正美著　和泉書院　2007年

　・「文化デジタルライブラリー」日本芸術文化振興会[https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc22/digest/index.html　2024/12/23](https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc22/digest/index.html%E3%80%802024/12/23)取得